

学びの風便り

リーディングスクール通信 48 R7.8.21

発行：松本市教育委員会 教育研修センター



❀ **学びの改革のあゆみ 開智小学校・波田中学校**



❀ **共に学び合う子どもと教師 ～わくわくする授業をつくる～**

開智小学校では「共に学び合う子どもと教師 ～わくわくする授業をつくる～」を研究テーマに掲げています。子どもたちが自らの「やりたい」を実現し、「やって良かった」「誰かの役に立った」と実感する経験を重ねる中で、さらなる「もっと〇〇したい」という新たな願いが生まれる授業を目指しています。また、子どもの姿を通して、教師自身も子どもの願いに寄り添い、共に学びを創る楽しさを感じながら、探究を深めています。



学びの共通体験～アンカーイベント～

1学期は、テーマに沿った共通の体験「アンカーイベント」に力を入れてきました。4,5年生の縦割りテーマ探究では、5～6回の共通体験を計画的に実施することで、子どもたちの中から自然と「問い」や「願い」が生まれてきました。複数回実施することで、同じテーマでも一人ひとりの興味関心が多様に広がることも明らかになりました。

3年生が繰り返し地域探検に出かけることや6年生が開智学校をテーマに外部の方とワークショップを開くなど、多くの学年でアンカーイベントを意識した活動が展開され、子どもたちが自分の「問い」や「願い」をもつきっかけが生まれてきています。

ワクワク楽しみながら学ぶ子どもたち



例えば、光をテーマにしたアンカーイベント。太陽光でチョコレートを溶かす活動では、曇りの日に挑戦し溶かせなかった際も、子どもたちは諦めることなく「どうすれば溶けるか」と鏡や虫眼鏡、アルミホイルなど様々な工夫で取り組んでいました。ふり返りには「次回は晴れた日にやりたい」「家から使えそうなものを持ってくる」という前向きな言葉が書かれ、2回目の挑戦では1回目の経験を生かし、光の反射や地熱利用など、新たな方法を自ら考えだす姿が見られました。4,5年生がお互いに意見を出し合い試行錯誤する様子は、アンカーイベントがきっかけで生まれた、いきいきとした学びの場面です。

教師も楽しんでます

アンカーイベントは、先生方の意識や実践にも大きな変化をもたらしています。先生方の中に「子どもに〇〇させたい」という指導観から、「子どもたちの『〇〇したい』」を実現するために教材研究を深める姿が多く見られるようになりました。

食グループの北澤先生は「お菓子の販売」という子どもの願いを実現するため、地域店とコラボできるきっかけを探しました。防災グループの望月先生は、専門家を招いた防災食体験や地震体験車の手配など、子どもの関心に応える環境を整えました。交流グループの島田先生は異年齢交流を複数回実施し、子どもたちの交流への願いに応えています。

「この時間が一番楽しい」と望月先生が語るように、先生方自身も手探りながら探究活動を楽しんでいる様子です。光グループの江口先生も、子どもたちがやりたがっていた太陽光での目玉焼き作りに挑戦し、その難しさや面白さを体感。子どもたちの「影絵で劇」「光のミュージアム」「虹のショー」など多様な「やりたい」の実現に向け、現在もワクワクしながら探究を進めています。

今後の展望

アンカーイベントから広がった子どもたちの「やってみたい」に沿って探究活動を進め、12月には保護者参観日や校内向けアウトプット会(4,5,6年生)を予定しています。また、4,5年生は「学びの創造研究会」で中間アウトプット会を行い、フィードバックを得ることで探究をさらに深めます。

開智小学校は、子どもと教師が共に「なぜ？」を深め、わくわくする学びを創り続けていきます。

＊ 波田中学校 「やってみる」から始まる学校づくり

これまで県の学びのリーディング校として、「全員が主役となる学校」を生徒と共に創ることを目指し歩みを進めてきた波田中学校。3年目を迎えるにあたり、『「やってみる」から生まれる、生徒とともに学ぶ授業づくり』を研究テーマに、新たな歩みを踏み出しました。

今年度から研究主任となった山口先生は、研究主任会やリーディングスクール・ラボに参加し、「いいな」と思った実践を、教頭先生や教務主任に相談し、波田中でも「やってみよう」と積極的に取り入れ、先生たちと学びを深めています。その中核に据えているのは、「職員研修」と「子どもの姿で語る授業公開」です。

「職員研修」と「授業公開」を軸に、1学期の波田中学校の学校づくりの歩みをご紹介します。

「問いづくり」をまずは先生方から体験しよう

5月には、総合的な学習の時間を「もっと一人ひとりが主人公となる学び」にしたいと願い、総合的な学習の時間の係の先生たち・教務主任とともに、探究を動かす「問いづくり」を学ぶワークショップを計画・実施しました。市教育研修センター主事のファシリテーションのもと、身のまわりから「気になること」を見出し、対話しながら問いの形を創り上げていった先生たち。「問いづくり」の経験を通して、「気になることを対話しながら深めていくことは楽しい」「“問い”といわれると身構えるが“気になること”というとしやすい」など、多くの気づきを交流しました。研究主任の山口先生は、この研修を通して、「問いづくり」の体験を全職員による共通体験にしたいと思いを強くし、全職員への研修へと発展していきます。



授業公開を通して、「子どもが主人公」となる姿を語ろう

6月には、数学科の4人の先生たち全員が1・2・3年のそれぞれ授業を公開しました。どの授業も、ピザなどの身近な題材をもとにするなど導入を工夫したり、お互いの考えを伝え合う場面を大切に、わからない所を友に相談できるように協働的な学びを取り入れたり、子どもの豊かな学びをひき出しました。参観された先生たちは、自分が授業の中でとらえた「子どもが主人公となった学び」の姿を付箋に書き、授業者や生徒にフィードバックしました。



また、6月の後半には、小中連携の一環として、波田小中学校の先生たちが、お互いの授業を自由に参観し合う機会を3日間設けました。ここでも昇降口に「フィードバックボード」を設置し、参観に来校した波田小学校の先生たちからの温かいフィードバックを掲示しました。

- ・一人一人が真剣に学びに向かう姿が素敵でした。まだ自分で考えるとき、友と関わる時、自然に相談するとき…必要観を持って選択できている所もすばしかったです。
- ・1年生の理科の授業、生徒の笑顔の明るい雰囲気、生徒の反応にとっても感心しました。グループで考え合う指導形態、小学校でも進めていきたいです。…1年生のどの学級も、学習に真剣に取り組んでおり、成長を感じました。

先生たちだけでなく、生徒たちも「フィードバックボード」を楽しそうに読んでいた姿が印象的でした。

「問いづくり」を全職員で共通体験にする

7月。5月に実施した係の先生たち中心に体験した「問いづくり」の研修を、全職員による研修として実施しました。今回のファシリテーター役は、山口研究主任です。前回同様、身のまわりから「気になること」を見出し、対話しながら問いの形を創り上げていきました。グループに分かれ先生たちは、リラックスした雰囲気の中で熱心に語り合いを交わします。「物価上昇はどうして？ 例 昔の卵かけご飯と今の卵かけご飯の値段をくらべてみたら？」「上高地線は将来どうなる？ 例 波田駅にあるガチャ、何を入れるとおもしろい？」など問いがつかわれていきました。研修終了後も「なるほどね」「たしかに気になる」「この『問い』おもしろいね」と、グループを超えて語り合っている姿は、まさに「探究の動き出し」そのものでした。8月20日実施の研修では、「職員探究の日パート2」として、グループごと探究テーマを決め、情報収集や探索活動を行う予定です。



波田中学校では、「やってみるから生まれる」挑戦する姿を大切にしています。子どもが「主人公」となる場面を授業で創出しようと、教師自身も学び、チャレンジを続ける波田中の先生たちです。